



# JSSH NEWS

## 日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会  
広報・渉外委員会

### 第57回日本手外科学会 学術集会を主催して

会長 金谷文則

(琉球大学大学院医学研究科整形外科学講座)

#### 目次

- 第57回日本手外科学会学術集会を主催して
- 新名誉・特別会員のご挨拶
- JSSH-HKSSH Traveling Fellow 報告記
- ハンドギャラリー(生田コレクション8) 「手は誘うHand's Temptation」
- 第5回手外科医のリスクマネジメント 「私のリスク回避法と対応法」
- 教育研修会のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

第57回日本手外科学会学術集会を2014年4月17日～18日の2日間にわたり、沖縄コンベンションセンターで開催いたしました。沖縄県で本学会が開催されるのは1996年の第39回(茨木邦夫先生)につき2度目になります。1957年の日本手の外科学会創設以来、新潟においては第4回(故河野左宙先生)、第15回(故田島達也先生)、第45回(吉津孝衛先生)、第53回学術集会(柴田実先生)が開催され、沖縄の2回を加えると「新潟手の外科」としては6回目の開催になります。

学術集会のテーマは**Standing on the shoulders of giants**としました。Sir Isaac Newtonが好んで使った慣用句“If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants.”で有名です。今回の学会では、現在の到達点を明らかにするとともに、それに新たな成果を積み上げ、より遠くの水平まで見渡せるようにすることを目的としました。

特別講演として私の恩師である斎藤英彦先生と吉津孝衛先生、招待講演として米国の恩師であるTsu-Min Tsai先生、Jesse B. Jupiter先生、韓国からGoo Hyun Baek先生、教育講演は生田義和先生、岡田潔先生に素晴らしい講演をしていただきました。ランチョンセミナー(うるまセミナー)は11題で国外では台湾からYuan-Kun Tu先生、米国からWilliam B. Geissler先生、スイスからDiego L. Fernandez先生に講演していただきました。応募演題：768題、シンポジウム：9セッション(57題)、パネル：7セッション(42題)、一般講演：669 採用614(一般口演：359、ポスター：255、採択率91.8%)、ハンズオンセミナー：3、企業展示：55小間で、参加者は1,599名、うち有料参加者(一般・ハンドセラピスト)1,472名を数えました。私は故田島達也教授のもとで手外科を学び、その後も

国内外のたくさんの手外科医の皆様に御指導を頂きました。「日本手外科学会」を成功裏に会を終えることができ、ご指導・ご支援をいただいた皆様にこの場を借りて深謝いたします。



閉会式後の集合写真 右手と左手のオブジェ

## 新名誉・特別会員のご挨拶

### 日本手外科学会名誉会員に推挙されて



済生会神奈川県病院 整形外科 佐々木 孝

この度、名誉会員にご推挙いただきました。大変名誉に感じておりますとともに、重責と思っております。

日本手外科学会に所属して、約40年が経とうとしていますが、この間、外傷を中心として発表ならびに投稿をさせていただきました。最も重点をおいてまいりました橈骨遠位端骨折の治療法ならびにPIP関節脱臼骨折に伴う陥没骨折の経皮経骨髄的整復法は、その後多くの方によって発展を遂げる分野となり、喜ばしいことと思っております。

私の学会活動はほとんどの方に「質問者」として印象されているようです。質問は、発表内容から完全に理解できなかった部分の確認や、結果と結論の間の飛躍などについて、聴衆としての疑義を呈するものですが、私の場合は皆様のお話を聞きながら以後の自分の研究に思いを馳せることが多く、結果として、発表から予想される今後の発展のような部分に及ぶことが多く、発表者が比較的若い先生の場合にはご迷惑をおかけしたものと思っております。

平成22年4月からは日本手外科学会の第五代理事長を務めさせていただきました。在任中には法人化の総仕上げや、手外科専門医を公的なもの、即ち専認構に認定された専門医制度とするための当局並びに専認構との交渉、ならびに日本医学会への加盟等のできごとがありました。(専認構＝日本専門医制評価・認定機構：当時)

社団法人化は、先代の三浪明男理事長が既に99%完成され、平成22年5月には登記が完了しました。法人化の達成により、対外的な基盤ができ、多くの方々の支援を受け平成23年2月に日本医学会入りが決定しました。

一方、専認構認定の専門医はハードルが高く、多くの関連規則の改定や、研修制度の見直しが必要であり、理事会、専門医制度関連四委員会の皆様には大変多くの時間を割いて頂くこととなりました。また、既に専門医であった先生方にも、筆記試験を受けていただく結果となりましたことはまことに申し訳なく思っております。

専門医制度の確立には整形外科と形成外科の両基盤であることが必須とされ、両学会からそれぞれの学会のsubspecialtyであるとお認めいただくことも必要でした。

これらの諸々の難問に理事会、委員会そして会員が一丸となって対応した結果、また落合直之先生が理事長として多大なご尽力をされた結果、平成25年6月に手外科専門医は専認構に認定されました。3年後には再評価が行われますので、今後も専門医制度の変革の方向性を見極めて行動して行く必要があります。

専門医制度の認定から、広告可能へ、さらには標榜科へと、道程はまだまだ遠いものと思いますが、今後の努力によって必ずや成し遂げられるものと信じています。

多くの試練を経なければならなかった二年間でしたが、土井一輝、平田 仁両副理事長に支えられ、なんとか任期を全うすることができました。

これからも一会員として日本手外科学会のために微力を尽くす所存ですので、ご指導ご鞭撻を賜れば幸いです。



## 日本手外科学会名誉会員に推挙されて

弘前大学医学部附属病院 病院長 藤 哲



私は、1977年5月に日本手の外科学会に入会しました。それ以来、2011年のWeb開催会議を除けば、37年間一度も学会を欠席することがなかったのは幸いでした。この会を通じて多くの師・友・後輩に遭遇できたことが、私の原動力になりました。本学会会員の皆様に感謝の意を表します。

この度は名誉会員の称号を頂き、恐縮するとともに、これを励みにさらに手外科を極めたいと思っています。しかしながら今置かれている環境が、手外科専門医の継続をも危ぶまれる状況です。この職を辞したら、スキルアップトレーニングセンターでの再教育の上、邪魔にならないように現場に復帰し、主として後進の指導に当たる所存です。

私の主催する本学会学術集会は大震災によりWeb開催となってしまいました。本学会歴代会長一覧をみると一番目立つとういことが嬉しいことです。

今後とも、宜しくおつきあいの程お願い致します。



## 日本手外科学会特別会員に推挙されて

熊本機能病院 整形外科 中島 英親



名誉ある手外科学会の特別会員にさせていただき光栄です。

私は熊本大学を昭和46年に卒業し、熊本大学麻酔科に入局し麻酔学を学び3年後に、新しくできた熊本赤十字病院に麻酔医として1年間勤務しました。この間に整形外科の米満部長と親しくなり、ラットを使用した血管吻合練習をし、指の再接着、マイクロサージャリーをしたいと思い、熊本大学整形外科に入局しました。関連病院としては、熊本赤十字病院で股関節、膝関節、脊椎外科、手外科などを学びました。熊本機能病院ができるとのことで、昭和55年11

月から3か月間広島大学整形外科に研修に行き、津下教授、生田講師のもとで、手外科を学び、屈筋腱縫合法、腱移行、先天疾患、肘外傷、腱癒着剥離など多くのことを学びました。昭和56年2月から3か月間金沢大学整形外科に研修に行き、野村教授、吉村講師のもとで、病理、マイクロサージャリーを学びました。遊離血管付き皮弁術をさせてもらいました。Wrap around flap、遊離静脈皮弁、遊離腓骨皮弁など多くのことを学びました。熊本機能病院が昭和56年5月開院すると同時に、救急患者が多く、18年間で切断指再接着425例480指。手再接着29例。前腕切断再接着15例。Wrap around flap: 拇指再建、指再建、足趾移植、有茎、遊離のPeroneal flap、遊離血管付き腓骨皮弁、有茎、遊離Scapular flap、遊離静脈皮弁、Lateral upper arm flap、Kite flapなどのflapを使用し指、手関節、前腕、肘、上腕の治療を行いました。この間、中部手外科、中国、四国手外科の先生：津下健哉、玉井進、阿部宗昭、生田義和、木野義武、吉村光生、藤澤幸三、井上五郎、多田浩一、中村蓼吾、田中寿一、政田和洋、貞廣哲郎、土井一輝、矢島弘嗣、柳瀬義章などの先生がたに学会、研究会でお世話になり、ゴルフは主として中部整形外科学会の後で有名なゴルフ場で数多くしました。上達はあまりしませんでしたでしたが、第20回の中整会で優勝したことがありました。昭和56年5月から10年間の外傷症例でマイクロサージャリーを使用した手外科を1冊の本として、エーザイ株式会社から出版しました。その後応用編を6年後、そして6年後さらに新たに出版しました。若い先生に使用していただくと本望です。またエーザイのホームページにこの本が読めるようにしてあります。動画は、第1回微小血管吻合法、第2回遊離血管付き肩甲皮弁、第3回有茎の血管付き腓骨皮弁、第4回遊離血管付き腓骨皮弁、第5回Wrap around flap、第6回前腕切断再接着、第7回Venous skin flap、第8回有茎のGroin flap、第9回Venous skin flap、第10回Kite flapの項目で見られます。エーザイのホームページで:m3.comではいと見られます。

資格認定委員会ができ委員長として、忙しい思いもしましたが、最近では落ち着いてきました。現在アドバイザーをしています。最近代議員制となり、手外科も変わってきています。このような時期に、特別会員になり、手外科での発展に少しでも役立つように、頑張りますので今後ともよろしくをお願いします。



## 日本手外科学会特別会員に推挙されて



麻生整形外科クリニック 麻生 邦一

この度伝統ある日本手外科学会の「特別会員」に推挙していただき、誠に有難うございました。身に余る光栄に存じます。私は昭和46年に九州大学整形外科教室に入局し、4年目から小林 晶助教授、光安元夫講師の御指導のもと、手の外科学の勉強を始めました。以来40年近く本学会を通じて整形外科医として、また手の外科専門医として成長できましたことを心より感謝申し上げます。

何と言いましても私の手の外科修行の中で革命的なことは昭和53年に光安先生の御推薦で新潟大学田島達也教授のもとへ3か月間勉強に行ったことです。当時田島先生のもとには斉藤英彦先生、吉津孝衛先生という飛車角とも称すべき門下生がおられ、その先生方に率いられた手の外科グループは昼も夜も大変活発に仕事をされ、また精力的に勉強をされていました。私も多くのことを教わり、夜遅くまで勉強したことを覚えております。

また昭和56年大分医大赴任の前、念願でありました広島大学の津下健哉教授のもとへ1か月間勉強に行かせていただきました。若い無知な私に親切に丁寧に教えて下さいました御恩は、先生の謙虚な態度とともに忘れることはできません。

学会活動について振り返りますと、私の大学の同級生で、卒業後教室は異なりましたが、同じ手の外科の勉強仲間であった二見俊郎君が不治の病に倒れた後から、私の学会活動は一変しました。時の理事長でありました中村蓼吾先生から副理事長を拝命したからです。これまで定款等検討委員会や国際委員会などの委員会活動に従事していましたが、いきなり理事会に出席して司会を務めることは大変なことで、とても円滑な議事運営とは行きませんでした。自分の非力を感じながらも、当時本学会の最大の課題であった専門医制度の確立、遂行に理事長を助けて必死に頑張りました。第50回日本手の外科学会記念式典(山形市)では、私の恩師の杉岡洋一九州大学名誉教授が、長年の学会事務局運営の功績を讃えられ、表彰されました後、副理事長の私がスピーチをすることになり、「I have a dream! I have a dream!、、、」と始め、日本手の外科学会の将来の夢を語りました。恩師とともに晴れがましい式典の席に立たせて頂きましたこと、今でも感謝の気持ちで一杯です。未熟な私を温かく見守り、御指導いただきました中村蓼吾先生に心より御礼申し上げます。

その後の2年間は三浪明男理事長のもとで働かせて頂きました。三浪理事長は事務局の移管、学会の法人化、定款作成など重要な課題を人並みはずれた指導力とスピードで次々と解決して行きました。理事長をしっかりと補佐し、お役に立てたかどうか今でも自信はありませんが、天国の二見君から「よくやった」と褒められる様に精一杯頑張ってきました。

最後になりましたが、これまで本学会を通してたくさんの先輩、友人から御指導、御鞭撻を賜りましたことを改めて心から感謝申し上げます。本学会の今後益々のご発展をお祈り致します。



# 日本手外科学会特別会員に推挙されて

宇治武田病院 病院長 勝見 泰和



この度、伝統ある日本手外科学会(日手会)の特別会員に選出していただき、大変光栄に存じております。役員・代議員の先生方、そして会員の先生方に心よりお礼申し上げます。今までの特別会員の先生方にくらべて、私の業績でよいのかという思いもありましたが、「これからも日手会のために貢献せよ」という命と理解し、特別会員に加えさせていただきました。

私が手外科医を目指すようになりましたのは、京都府立医科大学卒業後、母校での2年間の研修医を終え、関連病院で整形外科医として研修中のことです。新しく整形外科教室の教授になられた榊田喜三郎先生(日手会特別会員)のもとで研究班が作られ、手外科班に属するように命じられました。形成外科医になるつもりで整形外科に入局したので、ひとつ返事で承諾しました。手外科班のチーフは平澤泰介先生(手外会名誉会員)で、末梢神経の基礎的研究をされておられ、私も研究のお手伝いをする日々が続きました。当時、マイクロサージャリーの技術を持つ者が教室にはおりませんでしたので、オーストラリアでの短期留学をすることとなり、併せてSydney病院W. Bruce Conolly先生やRoyal Melbourne病院のB. Ian Taylor先生のもとで手外科研修をする機会もありました。昭和59年の第27回日手会(金沢大学教授野村進会長)では、「神経移植」がシンポジウムの演題として決定し、当然の事ながら平澤先生が座長に指名されました。そして私が平澤先生の代役としてシンポジストとして参加することになったのです。まだ基礎的研究を始めたばかりで、どうなることかと案じましたが、座長の助けもあり任を果たす事ができました。拒絶反応を抑えた同種神経移植は、再生軸索の足場としての働きはあるが、さらなる軸索の伸張にはSchwann細胞が必要であるという結論に達しました。その後、癌遺伝子を組み込んだSchwann細胞を作り、新しい神経栄養因子を求める研究も始めましたが、自家移植に匹敵する人工神経の完成には至りませんでした。その他、数多くの治療をしてきた医原性神経損傷に興味を持つようになり、学位も注射針先端による末梢神経の機械的損傷でいただきました。最近、採血時の神経損傷が全国各地で医事紛争の原因となっており、これらの紛争処理や解決法の検討を行って行きたいと考えております。

現在院長の立場ですが、手外科の手術もまだ数多く手がけており、本当に手外科を選んでよかったと思う日々であります。医原性神経損傷の治療を積極的にしてきたことは、結果として安全医療の構築に繋がっており、管理職としての役にも立っています。手外科の安全で質の高い医療を提供し、そして多くの若手の手外科医を育てることが、今まで育てていただいた日手会への恩返しと思っております。これからも現役で手外科診療を続けていきたいと願っておりますので、今後ともご支援・ご鞭撻をよろしく申し上げます。最後に今までご指導を頂きました日手会の先生方に感謝し、稿を終わります。



# JSSH-HKSSH exchange traveling fellow 報告記



金沢大学整形外科 多田 薫

このたび平成26年度 JSSH-HKSSH exchange traveling fellowとして、平成26年3月8日～16日の期間、香港で研修させて頂く機会を得ましたので報告させていただきます。

香港は人口715万人、面積1104km<sup>2</sup>と、ちょうど東京都の半分の人口と面積を持つ行政区です。香港全体を7つのclusterに分け、それぞれのclusterに1000床以上の基幹病院があるという効率的な医療体制がとられており、今回の研修ではほぼ全ての基幹病院を訪問することができました。

## 【施設訪問】

研修初日にRuffonjee and Tang Shin Kin HospitalおよびTseung Kwan O Hospitalで病棟を、Pamela Youde Nethersole Hospitalで外来を見学しました。今回の香港手外科学会のchairmanであるWan SH先生にご案内いただき3施設を順に見学するという密度の濃い1日であり、香港の多忙な医療現場を肌で感じることができました。

Tuen Mun hospital、United Christian HospitalおよびQueen Elizabeth Hospitalでは手術を見学しました。母指多指症や指尖部損傷に対する指動脈皮弁、慢性屈筋腱滑膜炎や指の腱鞘巨細胞腫、肘関節拘縮に対する関節剥離術などが行われており、丁寧に確実な手技とともに、指導医が執刀医に対し極めて教育的であったことが印象に残りました。

United Christian Hospitalでは施設見学を行う時間があり、平成26年度のHKSSH-JSSH exchange traveling fellowであるWL Chan先生にリハビリ棟を案内して頂きました。リハビリを行う患者さんのためだけの巨大な入院病棟があることや、動作解析に関する評価装置など大型の機械類が充実していたことが印象的でした。Tuen Mun HospitalではYY Chow先生から、移民の問題や高齢化社会に伴う問題など香港の抱える医療問題について多くの貴重なお話を伺いました。また、Queen Elizabeth Hospitalでは香港手外科学会の次期PresidentであるLo CY先生から、教育方針や昨今のデータ重視の論文が抱える問題点など、人情味あふれる熱いお話を伺いました。

## 【Live surgery】

Prince of Wales HospitalにはOrthopaedic Learning Centreと呼ばれる教育施設があり、手外科に限らず、数多くのワークショップが開催されています。本年度はPC Ho先生の司会で、大阪大学の村瀬先生のチームによる変形治癒骨折例に対する3次元矯正骨切り術のlive surgeryが行われました。海外で活躍する日本の先生を拝見し、身が引き締まる思いでした。また、多忙すぎることによってBusy HO先生と呼ばれていたPC Ho先生からは、香港を代表する手外科医の強いオーラを感じました。



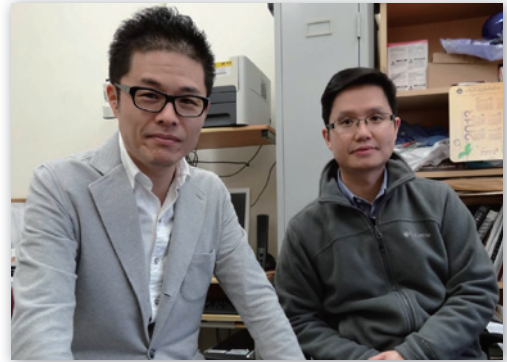
## 【香港手外科学会】

3月15日、16日の2日間、Princess Margaret Hospitalの講義室にて行われました。本年度のテーマはpaediatric upper limb problemということで、私は前腕骨の急性塑性変形に関する発表を行いました。演題に関しては、特に先天異常手においてどの発表も症例数が極めて多いことに驚くとともに、今後自分が研究を行う上で症例数の問題をどう解決するかを考えさせられました。学会期間中には埼玉手外科研究所の福本先生、ソウル大学整形外科のGH Baek教授が先天異常手について多数のレクチャーを行われ、苦手分野であった先天異常手について勉強させていただきました。

研修期間中は連日夕食の席で多くの先生方と楽しくお話させていただきました。ほとんどの先生から「日本の〇〇先生にお世話になった」というお話を伺い、これまでに諸先輩方が築き上げられた日本と香港の友好関係を実感しました。研修させて頂いたことで、日本の優れている点や改善すべき点について見識が深まったとともに、今後の診療や研究の方向性について考えるきっかけが得られたと感じています。この場をお借りして、貴重な研修の機会を与えて頂きました国際委員会担当理事の柴田先生、アドバイザーの別府先生および委員の先生方、また私を推薦して頂いた金沢医療センターの池田先生に深く御礼申し上げます。



学会会場にて



WL Chan先生と

## 手は語る ハンドギャラリー (生田コレクション8)

# 手は誘うHand's Temptation

広島手の外科・微小外科研究所 生田 義和

1972年1月12日(水)、New YorkのRoosevelt Hospitalの手術室に午後2時に入った私は、Dr. William Littlerの手術を見学した。一例目は彼の友人だという患者の足の痛風結節の除去、二例目は小指のみが屈曲したデュピュイトラン拘縮で、掌側のZ形成とボタンホール変形に対する矯正手術であった。術後、ボタンホール変形に対する手術の理論的根拠を、手術に使用されていた覆い布にペンで書きながら丁寧に説明していただいた。私はこの布の図の部位を切り取って、宿泊していた学生寮のバードホールに持ち帰った。その覆い布の切れ端は、42年経った今、私の手元に額縁入りの絵として残っている(図1)。Dr. Littlerの絵の腕前には定評があり、Dr. Bunnellのクロッキーや手の形がフィボナッチ数列に準拠していることを説明した、指の屈曲動作時の各部位の軌跡を描いた絵などが私の脳裏には焼き付いている。そのLittler先生を組織委員会の一人に招聘して1983年にパリのロダン美術館で“Rodin, les mains, les chirurgiens (ロダンと手と手外科：生田訳)”と銘打った展覧会は、フランスのDr. Merleが招集した組織委員会(Prof. J.W.Littler, Dr. G.Foucher, Prof. J.Michon, Prof. R.Tubiana, Prof. Cl.Verdan)によって開催された。Dr. Merleから2010年に送られてきたカタログ(図2)にはLittler先生の手のスケッチとサインが入っていた(図3)。このカタログに関しては、すでに日手会ニュース28号(2007.3.31)のギャラリーⅨの中で児島忠雄先生が述べられているが改めて掲載する。

François Auguste René Rodin (1840-1917) は、19世紀を代表するフランスの彫刻家で、「近代彫刻の父」と称される。代表作に「地獄の門」、その一部を抜き出した「考える人」などが有名であるが、その昔私が訪れたロダン美術館には多数の手が展示されており、Rodinがいかに「手」に強い興味を持っていたかが窺えるし、また手が如何に芸術家の創作意欲をそそる対象であるかがわかる。この本にFig. 1として

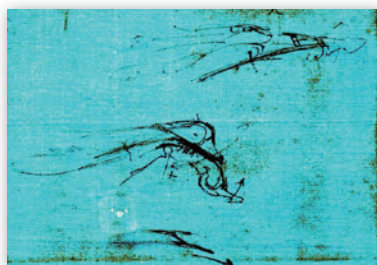


図1



図2

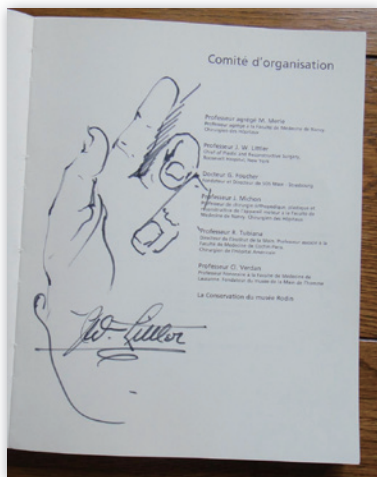


図3

載っているのがカレーの市民の一部Andrius d'Andres (図4) であり、その他多数の手が載っている (図5)。図らずも私は、今から55年前の1959.12.5に描いたこの彫像の鉛筆画が手元に残っているのを最近発見した (図6)。今この2つを比較してみると殆ど同じ角度からの写真と写生で不思議な縁を感じる。いずれにしても、手は芸術家の創作意欲を強くそそる肉体の一部であり、手は外科医の治療対象として飽くなき挑戦に値する器官である。



図4



図5

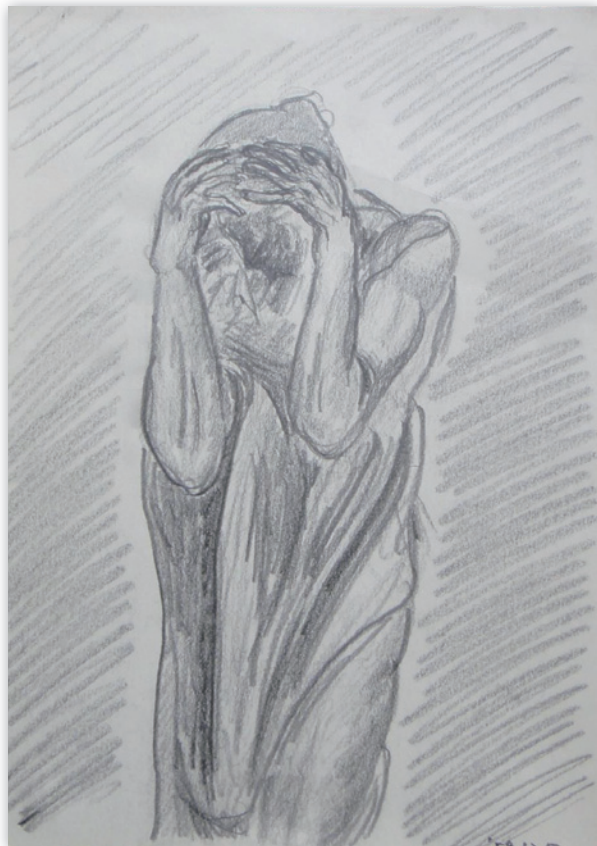


図6

# 私のリスク回避法と対応法

川崎市立川崎病院 堀内 行雄

一般的に、日常診療で行われる医療行為にはリスクは付きものであり、細心の注意を払っていてもいろいろなインシデントやアクシデントは起こりうると考えていなければならない。

狭い部位に、末梢神経、血管、腱、骨・関節など大事な組織が集中している手外科領域では、少しの油断がリスクに繋がる可能性が高い。手外科領域で良い結果を得るために最も重要なのは、解剖学、特に機能解剖を十分に理解しておくことである。それに、外傷であれば、どのような組織損傷の可能性があり、どのように損傷部位を検索し治療すれば一番良いかを即座に判断し見逃しがないようにしなければならない。経験や技術に伴い、そのスキルは向上していくわけであるが、油断しなくてもpitfallに落ちる可能性があることを常に警戒する必要がある。

手術が良好に終わっても後療法で縫合した屈筋腱や神経の再断裂が生じるなどいろいろなことが考えられる。その意味からも手外科医とハンドセラピストは常にリスクに対して敏感でなくてはならない。

手外科医は新しいことをするのが好きな医師の集まりであると思う。常に工夫して新しい治療法を見つけようとする。特にその時にはリスクに直面する可能性が高まる。

アクシデントが生じたとき、どこの領域でも同じであるが、最も大切なのは、患者ならびに患者家族との信頼関係である。それには、術前から誠実な態度で臨み、術前に可能性のあるリスクは説明しておく。そして、書面に残し、本人、または必要ならその家族や代理人に署名をしてもらっておく。もし裁判になったとき、ICが不足したとすることが、最後の落としどころとなることも多いが、それをなくす上で重要な意味を持つ。

たとえば、採血における末梢神経損傷は、いつ起こっても不思議はない。そのような場合に実際に採血した者がそれに対してどのような知識を持っているか、また、その事態が生じたときにどのように対処するかは極めて重要であり、その予後も含めて大きな分岐点になる。日頃からのそれらの安全教育と生じた時の対処法を職場でマニュアル化するなど定期的に注意を喚起し、徹底しておくことは重要である。理想的に出来なくとも、少なくとも新たに就職した時や職場が変わった時などに徹底しておくこととマニュアルがあればそれを説明し、その存在を理解させておくことが大切である。

大事なのは採血をする者が静脈採血をする際にどこが安全かという知識を、持っているかということである。橈骨神経浅枝の損傷の危険性の高い手関節橈側での採血は避けるべきであるし、肘関節屈側中央部の正中皮静脈穿刺の際、深部にある正中神経の損傷も避けなければならない。また、橈側前腕皮静脈では外側前腕皮神経の損傷を、尺側前腕皮静脈では内側前腕皮神経の損傷が生じる可能性があることを知っていなければならない。後者の2つの神経は静脈とまわりつくように走行していることもあるので、損傷は避けられない可能性がある。

上腕で止血しても、穿刺しようとする静脈がわかりにくい場合は、暖めたり、下垂したり、擦ったり、軽く叩いたりして静脈を怒張させて採血するなどの工夫が行われる。それでも運悪く、針を刺入したときに疼痛や放散痛が生じたときは、直ちに針を抜き、止血する。必要なら他の場所で採血する、必要なら採血者は交代する、などの決まりが必要となる。

さらに、しびれや疼痛が残ったと訴える様なら、上司と医師（出来れば手外科医、整形外科医、形成外科医）に診断・治療を依頼する。

診察した医師は、針を刺した位置や深さ、Tinelサインの状況から診て、その症状から、何という神経が傷ついた可能性があるかを患者に伝え、前腕の感覚神経であれば、2～3週で治る可能性もあるが、その期間で治らなくても、1日1mm程度の速度で回復して放散痛を生じる部位が下降し、約3～4か月はかかるかもしれないが最後は治るということを伝える。後はその他のきめ細かい説明や、その後の経過観察が必要で、決して「放っておけば治る」といわないことである。そのような状況下で患者に説明がなされないと患者は不安になり、肘の場合は屈曲位で伸ばそうとしなくなる。そうすると、痛みがさらにエスカレートして、中枢感作され、CRPSに発展してしまう可能性がある。そうならないためにも、傷害された神経の種類を同定し、きめ細かい説明と早期から肘を伸ばすことを指導することが重要である。

当院では、このように早期から対応しており、整形外科医に相談させている。私が関係する患者さんでは幸いなことにCRPSを発症した症例はいない。初期対応としては、是非、この方針をとることをお勧めする。

## 教育研修会のお知らせ

### ◆第20回Web春期教育研修会◆

会 期：平成26年10月14日(火)～12月26日(金)

第26回春期教育研修会をWebで開催しております。詳細は下記URLよりご確認ください。

詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse>

.....

### ◆第58回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成27年4月16日(木)～17日(金)

会 場：京王プラザホテル

会 長：根本 孝一(防衛医科大学校 整形外科)

詳 細：<http://www.jssh2015.umin.jp>

.....

### ◆第21回春期教育研修会◆

会 期：平成27年4月18日(土)

会 場：京王プラザホテル 錦

主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse>

.....

### ◆第21回秋期教育研修会◆

会 期：平成27年8月29日(土)～30日(月)

会 場：東大寺文化センター

主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse>

## 関連学会・研究会のお知らせ

### ◆第27回日本肘関節学会◆

- 会 期：平成27年2月13日(金)～14日(土)  
会 場：沖縄コンベンションセンター  
会 長：金谷 文則(琉球大学医学部 整形外科学 教授)
- .....

### ◆第58回日本形成外科学会学術集会◆

- 会 期：平成27年4月8日(水)～10日(金)  
会 場：ウェスティン都ホテル京都  
会 長：鈴木 茂彦(京都大学大学院医学研究科・医学部形成外科学 教授)
- .....

### ◆第29回日本医学会総会 2015関西◆

- 会 期：平成27年4月11日(土)～13日(月)  
会 場：国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都、京都大学百周年時計台記念館、  
京都大学医学部芝蘭会館  
会 頭：井村 裕夫(京都大学名誉教授・元京都大学総長)  
詳 細：<http://isoukai2015.jp/>
- .....

### ◆第88回日本整形外科学会学術総会◆

- 会 期：平成27年5月21日(木)～24日(日)  
会 場：神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場  
会 長：吉川 秀樹(大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学整形外科教授)  
詳 細：<http://www.joa2015.jp/>

---

## 編集後記

---

今年、大雨による浸水・洪水、火山の噴火があり、10月まで大型台風が続くなど、日本は災害大国であると、あらためて痛感する昨今です。そんな中、日々は刻々と過ぎていきます。医療界では、日本専門医機構が設立され、現在、専門医機構認定の専門医制度ができつつあります。日本手外科学会の先輩たちの御尽力でできた手外科専門医制度も、近い将来、それに加わることでしょう。

さて、広報・渉外委員会では、逐次、ホームページの更新を行っています。一般の人に分かりやすいようにと、昨年度はホームページのトップページに「一般の方へ」というボタンを作成するなどいくつかのマイナーチェンジを行いました。今年度は、一般の人から手外科に関して、よく聞かれる質問に対してQ&Aを作成・掲載し、今後逐次追加していく予定です。また、手外科専門医が診療している医療機関へアクセスしやすくするために、手外科専門医名簿のページを更新する予定で、現在準備中です。ホームページに関するご意見・ご要望がありましたら、事務局までお寄せください。

(文責：西浦康正)

---

広報・渉外委員会

(担当理事：島田幸造, アドバイザー：勝見泰和,

委員：麻田義之, 垣淵正男, 草野 望, 千馬誠悦, 西浦康正, 日高典昭)